**説教20230409コロサイ3：1-4マルコ16：1-8「喜びの現れ」**

**三日前に私たちは御子イエスキリストの十字架上での死を味わい、この世界は最も暗く悲しく痛みに満ちた時を迎えていました。そして、今日、私たちは復活された主イエスに出会い、この上ない喜びで満たされています。イースターおめでとうございます。**

**とはいえ、その喜びは、未だ顔と顔とを見合わせてはっきりと見られるように明瞭ではなくて、私たちはおぼろげにイエス様と共にいる喜びを味わっています。**

**聖書にもそのように記されています。**

**コリントの信徒への手紙一/ 13章 12節**

**わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。**

**私たちがイエス様と顔と顔とを合わせてまみえることになるのは、最後の最後に全ての物事が完成するときであります。その時には最早、もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もないのです。最初のものが過ぎ去ったからです。**

**最後にキリストと共に訪れる悲しみも嘆きも労苦もない完全な喜びと言うのは、やはりこの地上の喜びとは違うことと言えるでしょう。しかし、私たちはこのイースターそして毎日曜日、更に言えば毎朝ごとによみがえりのイエス様に出会って、その御言葉を味わい、その完全な喜びの前味を味わっていると言えるでしょう。**

**イエス様のよみがえりの前に、私たちは必ずイエス様の十字架の死によって癒され慰めらます。私たちはこの地上を肉体をまとって歩んでいますので、同じように肉をまとってこの世に来られた主イエスの十字架上で受けた傷と流された血潮によって、癒され慰められるのです。**

**イザヤ書51章より**

**彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。**

**このような形で癒され救われる私たちですが、私たちはさらに歩みを進めて、上にあるものを求めて、キリストと共に在る喜びを味わうのであります。今日のコロサイの信徒への手紙に記されてあるとおり**

**上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。**

**あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。**

**あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。**

**ということであります。**

**イースターの主日に読まれる聖書箇所と言うのは、主イエスが復活されたという記事であります。今日はマルコ福音書の御復活の記事が読まれましたが、他の３つの福音書にもそれぞれ並行記事が記されています。今日の説教題であります「喜びの現れ」に関して、この４つの並行箇所を比較してみますと、最も喜びに対して淡白であるのが、今日読まれましたマルコ福音書であります。マルコ福音書には、イエス様の復活の喜びではなく、イエス様が復活したことに驚き、震えあがって正気を失った人々の様子が描かれています。それに較べまして、マタイ福音書には 、28章 08節**

**婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。と喜びの様子が記されていますし、ルカ福音書には 24章 41節以下に**

**彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。**

**と、復活して弟子たちの間に現れたイエス様との様子が、この上ない喜びとして記されているのです。**

**マタイ福音書とルカ福音書は、先に記されていたマルコ福音書を原資料として、約10年後に記されました。つまり10年間の年月によって、人々はイエス様の御復活ということに対してより冷静に、そして喜びをもって語ることが出来るように変えられたということです。**

**最初にかかれたマルコ福音書では全体的にみても、喜びを語るのに非常に慎重であり、たんぱくであるように思えます。そしてマルコ福音書で語られている喜びの内容は、イエス様の喜びではなくて、人間的な喜びばかりです。その内容は、ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせたですとか、移ろいやすい大勢の群衆が、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。といった、やがて悲しみに終わってしまうこの世の人間的な喜びのことで、それらのことが数か所で語られているのです。**

**それに較べまして約１０年後に記されましたルカ福音書は主イエスと共に在る喜びがとてもリアルに記されています。例えば、イエス様の誕生予告の記事では、「恐れるな、私は民全体に与えられる大きな喜びを告げる」ですとか、「その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。」ですとか、**

**天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。**

**といった、よく知られた聖句が思い起こされることでしょう。**

**私たちはマルコ福音書と、約１０年の後にかかれたルカ福音書を較べてみて、このようにルカ福音書のほうが、格段にイエス様の喜びを語っているので、ルカ福音書のほうが優れた福音書だと見做すでしょうか。そうではありませんね。どちらの福音書も同様に主イエスにある喜びを語っている神の言葉であります。**

**私たちは、今の世の中にあって傷つき苦しんでいます。ですからイースターの主日であっても、正直そんなに喜びに満ちた心境になれないということもあるでしょう。喜べ喜べと言われてもかえって実は心が沈んで行くということもあるでしょう。それは当然のことです。なぜならば私たちはまだ完全にではなく、おぼろげにイエス様と共にいる喜びを味わっているのですから。そしてそんなときは、かえってマルコ福音書の語りによって私たちは慰められることでしょう。マルコ福音書は喜びを語ることに慎重であります。そして、人間がはかない喜びを抱いてぬか喜びをする空しさを教えてくれます。マルコ福音書は、私たちが人間的な喜びと、キリストにある本当の喜びとを混同してしまうという罪に陥らないように、私たちを導いてくれます。**

**そして、マルコ福音書は直接にはイエス様と共に在る喜びを表現してはいませんが、聖霊によって記されたその文章の行間には、その喜びが満ち満ちていると言ってよいでしょう。**

**このように１０年間と言う時間の流れが、喜びの語り方を変えたのだということですが、もちろん私たちが主と共に在る大きな喜びは、変わらないことであり永続するものであります。但し、何回も言いますが、その主にある喜びには、私たちがこの地上にある限り覆いが掛けられているのです。**

**私たちの信仰生活に即してみて観ましても、教会でも１０年経てば、召天される方もあれば、新たにメンバーに加えられる方もいることでしょう。新たな牧者が迎えられるという変化もあるかも知れません。それでも、その移ろいの中で、変わらないのが主イエスキリストと共に在ることの一つの喜びであります。**

**今日交読されました詩編６５篇には、十字架を通り越した先にある、私たちがキリストと共に在る大いなる喜びの姿が具体的に描かれています。**

**あなたは地に臨んで水を与え／豊かさを加えられます。神の水路は水をたたえ、地は穀物を備えます。あなたがそのように地を備え**

**畝を潤し、土をならし／豊かな雨を注いで柔らかにし／芽生えたものを祝福してくださるからです。**

**あなたは豊作の年を冠として地に授けられます。あなたの過ぎ行かれる跡には油が滴っています。**

**荒れ野の原にも滴り／どの丘も喜びを帯とし**

**牧場は羊の群れに装われ／谷は麦に覆われています。ものみな歌い、喜びの叫びをあげています。**

**この詩編は主イエスと共に在る喜びをビジュアル化して歌っていますが、主イエスの体の枝である私たちは、神の水路に流れる水であり、喜びの叫びをあげている一人ひとりなのです。**

**私たちは何年たっても又どこに行っても、この同じ喜びを、主イエスにあって共有できるものとされました。それは、イエス様から与えられた信仰・希望・愛によって、私たちはそのような者たちへと変えられたからです。私たちは召天して、物理的に離れてしまうにしても、この同じ信仰・希望・愛によって、最後の完成の時迄、主イエスの一つの喜びの内にとどまり続け、同じ喜びを喜び合える者たちとされています。この様に、キリストにある大きな喜びは時間と空間を超えて広がっていくのです。**

**人間的な喜びとは全く比べ物にならないこのような主イエス・キリストの大きな喜びですが、私たちはその喜びの内に住まうようになる前には、間違いなく、墓を出て逃げ去った婦人たちのように、震え上がり、正気を失い。そして、だれにも何も言えず。恐ろしかった。という体験をすることでしょう。なぜなら、そのキリストの喜びは人間的な喜びの小ささを思い知らせ、人間的な喜びのはかなさをあらわにするからでしょう。**

**今の教会では殉教する牧者の姿があまり想像できませんが、昔の教会には殉教する牧師が普通にいました。日本の教会でも80年前の戦中には殉教して命を落とされた牧師がおられました。殉教する牧師の喜びとは何でしょうか。それは自分のこの地上での命を、キリストの大きな喜びのために捨てるということなのではないでしょうか。そうはいっても、人が死に直面するということは恐ろしく震えあがり正気を失うような出来事であることに違いはないでしょう。**

**そして、教会ということで考えるならば、涙を流しながら殉教をした牧師は、命を落とすことによって間違いなく教会に喜びの種をたくさん蒔いて、10年後のその教会で、キリストに在って大喜びしている人たちの中に、天上から同じ喜びをもって参加していると語ることが出来るでしょう。**

**お祈りします**

**父なる神よ、あなたはこのイースターの朝に、御子イエスキリストをよみがえらせ、私たちと共にいさせてくださいます。その大きな喜びに感謝し、あなたを褒めたたえます。**

**又、あなたは今日ばかりではなく、毎日曜日、そして毎朝、よみがえって下さり、私たちに大きな喜びを与え続けて下さいます。**

**私たちが、日々の生活で味わっている小さな、取るに足りないような喜びの内に、キリストの喜びを見出し、それを共に見つめながら、大きく育てていくことが出来ますように。**

**今の世には、お仕事をする中にも、そして家庭生活のなかにさえも、大きな苦しみや悲しみがあります。しかしキリストは全ての人を見捨てようとはなさらず、よみがえって下さり、私たちの苦しみ悲しみを、楽しみ喜びへと変えようとされています。どうか私たち一人ひとりが、そのことを信じ、常に御子キリストによりすがって生涯を過ごしていくことが出来ますように。**

**今は、世を去った方々を覚えます。キリストに在る喜びは永遠に続き、悲しみに変わることがありません。私たちが、今同じ時に同じ場所で、あなたを褒めたたえる喜びの声を響かせることが出来ます幸いを覚え、この上ない感謝をあなたにお捧げいたします。**

**父と聖霊と共に**